

城柵の北の平安時代

— 平安中期の北東北地方と出土文字資料 —

はじめに

「城柵の北の平安時代」というタイトルを付けました。熟しておりませんで、自分でもなかなか恥ずかしいタイトルです。私は田舎に転々と住んでまいりました。また、田舎を旅行したりするのが好きなものですから、地方の研究をずっとやってきてるわけであります。それと生来へそ曲がりのところがありません、政治の中心地にみんな関心が向いているなら、逆のことをやらないといけないというように、自分でそちらのほう向いて研究をしてきたところがあります。今日は、平安時代という時代を取り上げますけれども、平安時代というのは日本史の中でも特に貴族社会、藤原道長といった有名な人物がいたりしますが、そういった人たちに代表されるようなイメージが強い時代だと思えます。しかし、その時代を考えるうえで見落とさないで、視野に入れておいた方がよい問題として、辺境の問題を今日ご紹介したいと思えます。平安時代というものを描い

て、イメージをもっていただくときに、今日ご紹介するような内容も踏まえて、心にとどめおいていただければというつもりでお話をしたいこうと思っています。

ある時期の社会を理解していくときには、辺境の様相というものも含めた歴史像が必要とされるでしょう。そういうものも、わかるところまでの範囲は取り上げて考えないといけないのではないかと思えます。時期や地域によってさまざまですが、辺境における社会の展開というのは、実はその時期を考えるうえで特徴的なことを示している場合も少なくないのです。平安時代の場合にも、その間に地方では武士が起って力をつけているというようなことはよく知られていますが、そのさらに外側の地域というものの展開もやはり視野に入れて、時代像をつくっていかなければならないのではないかとこのように、私はそう感じるわけであります。

今日の話は「平安中期の北東北地方と出土文字資料」という副題を付けました。平安時代を、前期、中期、後期と分けてお話をしよ

鐘 江 宏 之

うと思っています。平安前期と申し上げていますのは、平安京遷都から大体一〇世紀前半の『延喜式』が完成するころまで、律令制に基づいて政治制度がさまざまな改変を経ながらも充実にいつている時期と考えていいと思います。平安中期と仮にここで申し上げますのは、その後の一〇世紀の中ごろから、藤原氏北家を中心にしたいわゆる摂関期の時代であります。そして平安後期、これは後三条天皇の親政以降、鎌倉幕府成立のころまでのいわゆる院政期です。おおよっぱですけれども、平安時代が四〇〇年間ぐらいでありますので、一三〇年ぐらいずつに、大体等分に分かれます。東北地方の南半分ぐらいまでは、政府の支配が比較的及んでいます。私が「城柵の北」と申し上げています東北地方の北半分は、これはまさに辺境地帯なのであります。平安中期に関して文献史料がほとんどありません。ですから、東北辺境の様相としては、実は平安中期というのは最もわかっていない時期なのです。まだ平安前期、あるいは奈良時代ぐらいのほうが、断片的に状況が知られるような史料もあります。時代の降った平安中期のほうが、謎の世紀というような言い方をしてもよいぐらいに、わからないわけです。

当然、このように文献史料が少ないというのには理由があり、一つには、平安中期の辺りまでで歴史書を編纂する国家事業、六国史を編纂するということが終わってしまったために、その後の時期に史料がそろっていないということがあります。近年になりまして、この史料が少ない状況に対して、考古学の発掘調査の成果による知見、さらにはそこで出土文字資料も見つかっておりますので、そういったもので少しこの時代のことを考える条件がそろいつつあると

いうところです。

それから、平安中期、摂関期の社会を全体としてどう考えるかという点で、日本史を考えていくときの大きな問題として、今日お話をする上で少し意識してみたいと思っておりますのは、この地域が平安前期から中期へどのように変化するかという問題です。平安前期には東北地方の歴史の展開のうえでは、政府の軍隊と当時その地域に居住していた蝦夷と呼ばれた人々との戦争というイメージがあるわけですが、その前期の戦争のイメージから中期にはどう変わるのかということも、実は国家全体の歴史を描いていくうえで大事な点ではないかと思えます。このようなことを意識しながら話を進めてみたいと思えます。

一 平安前期の城柵社会と「城柵の北」

律令政府は、東北地方を支配をしていくうえで、城柵と呼ばれる施設を東北地方の各地域に作って、それを拠点にして支配を進めていきました。城も柵もいずれも「き」と呼んだりします。一番有名な多賀城も「たがのき」と呼ばれることもあり、「城」と書いたり「柵」と書いたりするようですが、研究上は併せて城柵というように呼んでおります。

城柵の支配がどの辺りまで進んでいったかという点では、北限の城柵は現在の秋田市にあります秋田城になるわけですが、これは八世紀の前半に作られました。それからやや内陸の方で、現在、弘田柵跡という遺跡が見つかっている所があります。最近の有力な学説ではその南の雄勝郡に雄勝城が八世紀半ばに造られ、これが九世紀

になって移転してきた施設ではないかというふうに考えられているのが、この弘田柵跡という遺跡で、現在の大仙市というところに所在しています。

それから現在の岩手県のほうでは一番北は志波城、これは現在の盛岡市になります。それからそのやや南に徳丹城があり、さらにもうちょっと南に胆沢城がありますが、これらはいずれも、八世紀末から九世紀の初頭にかけて坂上田村麻呂を中心とした政府軍による北上盆地の平定の後に造られた城柵です。胆沢城と志波城の二つが当初設定された城柵ですが、志波城は早い時期に水害を避けてその南の徳丹城に移転し、胆沢城・徳丹城体制でしばらくはその地方を押し控えていました。そのころ、弘仁二年（八一）に、この辺りに志波郡、稗貫郡、和賀郡という三つの郡が造られました。しかし、九世紀の初頭に造られたこれら三つの郡は、一〇世紀に編纂された『延喜式』の中には見えず、設置後に再びこの辺りの国家の勢力が後退した可能性も考えられています。結果的に九世紀の半ばごろに徳丹城は放棄されて、北上川沿いで言えば胆沢城が一番北の城柵ということになります。

九世紀代にこうした城柵が設置されているのですが、それ以降、城柵は北に進んでいきません。それを研究者は、この辺りが北緯四〇度にあたりますので、北緯四〇度ラインというような言い方をします。私が今日お話をしています「城柵の北」というのは、まさにこのラインから北で、郡制が未施行であり、そして城柵がそこから先には行かないというような地域ということになります。

この「城柵の北」のことはなかなかわからないことも多いのです

が、しかし九世紀の平安前期の段階では少し様子を窺うことができます。政府の東北政策として造られた北限の城柵は、もともと施設のないところへ役所を作ったものであり、そこへ拠点ができて、政府はそこを中心に開拓をしていくわけです。そこへ南の方から移民を送り込んでいきます。城柵の柵に属する戸ということによって柵戸（さくこ）と、あるいは訓読みでは「きのへ」と言いますけども、移民によって柵戸を設置していくわけです。北限の城柵へ柵戸をどんどん移配していった痕跡というのは、例えば現在の秋田城の出土文字資料を分析していきますと、下野国とか上野国などの関東地方辺りから入っていった人々の氏の名前が出てくるというようなことから、南の方から移民として入ってきた人々がその地で活躍していることがわかるわけです。

あるいは秋田城の出土文字資料の中には、浮浪人の存在が窺えるものがあります。浮浪人というのは、国家が定めた戸籍上登録された地を離れて、どこかに行っている存在です。国家から割り当てられた重い負担をのがれて逃亡し、いったん逃亡してしまうと、逃げていった先では浮浪人として扱われるわけです。本来は、浮浪人をもともと登録されていた土地に戻すというのを国家の大原則としているのですが、城柵では別のように、やってきた浮浪人をそのまま抱え込んでしまうようです。開拓をしていく上で、浮浪人であっても来てくれるんだったらそこへ縛りつけないということかと思えます。

こうした移民がいる一方で、地元の人ともいうべき蝦夷がいるわけです。周辺にはもともと蝦夷が居住しているわけで、いわばこの

城柵の社会というのは、移民と蝦夷が混在する世界であります。その蝦夷も、日常ずっと戦争をやっているわけではなく、国家はいっそもは平和のうちに交渉し、できれば政府の支配下に入ってくれるように常に心掛けているわけです。

例えばある時期に、秋田城が廃止になる、あるいは移転するというようなことが話題になったときに、その秋田城の支配下にあった蝦夷、政府の支配下に比較的近くなった蝦夷を俘囚という言い方で位置づけていますが、その俘囚が秋田城の移転に反対するというようなことを示す史料があります。城柵の支配下の世界というのは、移民と蝦夷が比較的平和裏のうちに混在している社会ということが言えるかと思えます。秋田城、志波城あたりは大体そういう世界でして、さらにその北の世界との間では、もちろんその北には蝦夷と呼ばれる人たちが住んでいることになるわけですが、出先の秋田城辺りでは北方の蝦夷たちと交易をしています。北方でしか手に入らない産物があるわけです。毛皮であるとか昆布であるとか、そういった北方の産物を手に入れるために、役所のほうで交易をして、役人が私的に交易することもあるかと思えますが、そういう形の交流が行われています。戦争して略奪するというのではなく、できれば平和裏のうちにそういう貴重な物資を獲得するというのが行われているのです。そういう形で何らかの人的な交流が、城柵が設置されて以降はずっと続けられているのです。

それから、宗教の面で言いますと、北の蝦夷の世界に対して仏教が広まっています。蝦夷は布教の対象です。九世紀初頭の『東大寺諷誦文稿』という史料がありますが、そこにはさまざまな人々に

仏の教えを説いていくときにどうい言葉で話したらよいかという問題について、それぞれの方言でもって話さないといけないと言われています箇所があります。その中に「蝦夷方言」という語が出てきます。ですから奈良の大寺院あたりから見ても、蝦夷は布教の対象として考えられているのです。九世紀になってからの史料ですが、出家が認められている俘囚が知られていたりしますので、蝦夷にもどんどん仏教が広まってきました。すでに秋田城の辺りでは、九世紀までに以上のような状況になっているわけです。さらにその北の状況についてもっと推測できる手がかりとして、西暦八七八年に起きた元慶の乱の状況があります。

元慶の乱は、秋田城を蝦夷が焼き打ちした事件で、当初は政府軍に対して蝦夷軍のほうが優位に立っていたのですが、それに関する史料で、『日本三代実録』の中にやや長い記事があり、秋田城下の賊地として、反乱軍方の地名が出てきます。上津野、火内、榎淵、野代、河北、脇本、方口、大河、堤、姉刀、方上、焼岡という十二の村が出てきますが、これらは大体、秋田城から北側の米代川の流域までの範囲に比定されています。一方、蝦夷たちの中でも反乱方ではなくて政府方についた者たちもおり、「化に向かう俘地」として添河、霸別、助川の三村が出てきます。この添河、霸別、助川は、秋田城から南東側に分布している村であろうと考えられています。

これらはいずれも、蝦夷の村という形で出てくるのですが、このように村単位で蝦夷が把握されていることがわかっています。

それからこの史料には、さらに北側の地域として津軽地方が出てきます。反乱が起きたときに政府からは津軽地方の動向がわからず、

実はその津軽が大変な勢力をもっていることが恐れられているのです。「津軽の夷俘は、其の党、種多し。幾千人たるかを知らず。天性勇壯にして、常に習戦を事とす。若し逆賊に速らば、その鋒、当て難し」と書いてありまして、何千人になるかわからないほどの大変な兵力をもっていて、しかも、天性勇壯で、武力にたけているということが恐れられている、というように出てきます。

実は青森県の津軽地方の発掘調査が、ここ一〇年から一五年ほどの間に急速に進みまして、その結果、八世紀段階ではあまり村といえるような集落が見られなかったものが、九世紀になると集落が増加して行くことが知られるようになりました。しかも、爆発的に増えるというぐらゐ変わってくるということでもあります。大勢力であることの背景として、実際に人口が増えているのかと思いますが、これに関して非常に興味深いことに、同じ『日本三代実録』の中で、「国内の黎氓、苛政に苦しみきたり、三分の一は逃げて奥地に入る」という一節が知られます。出羽の国の黎氓、すなわち庶民が、国司が行ってきた苛政に苦しんで、人口の三分の一が奥地へ逃げていったと語られているわけです。

三分の一というのはかなり誇張があるかと思いますが、ここに語られている奥地というのは、まさに支配の届かない所という意味でありまして、より北の地を指しており、津軽も含む範囲であろうといわれています。九世紀段階、元慶三年に元慶の乱が起こるよりも前の段階で、城柵のもとに活動していた人たちが、つまり柵戸であるとかその地にいた蝦夷といった人たちが、城柵の世界からより北の世界へ逃亡していった可能性がここで見いだされるわけです。

そのように考えますと、津軽地方の大勢力というものの中には、南から流入していった人々がかなりの割合で存在するのではないかと、ということが推測されます。人間が移動するということは、さまざまなものを携えていきますので、城柵のもとの種々の文化的な要素も持ち込まれる可能性があるだろうと思います。今後、蝦夷とはどういう存在なのかということを考えていく上では、こういうことを踏まえていかなければならないでしょう。私自身は、特にこの九世紀段階ぐらゐになれば、もともと柵戸にいた良民であったような人々でも、逃げていったら、蝦夷という扱いでレッテルを張られてしまっているんじゃないかと思えます。そのような見方がないと、蝦夷の地とされる津軽地方で、集落がどんどん展開していくということが、理解できないだろうというように考えております。

それから、元慶の乱では、その北に渡島と呼んでいる地域、北海道の勢力だというように考えられていますけども、この地域の蝦夷（Ⅱ渡島狄）も出てきます。元慶の乱では、津軽のうちの一部と渡島の全体が政府方についたということで、その南側の地にあった反乱軍の村々が結局降伏することになりました。この渡島の蝦夷（Ⅱ渡島狄）も、その後の時代の展開を考えてみると、津軽地方との結びつきに興味深い点があります。津軽平野のちようど真ん中あたりに五所川原という市がありますが、その付近で須恵器の窯跡がたくさん見つかっています。須恵器というのは特殊な技術で焼いた焼き物ですので、簡単には生産できません。特別な窯を作らないと焼けない焼き物なので、そこで作ったものは特産品としてほかの地方へ送られていくわけです。この五所川原産の須恵器は、もっぱら

北の世界へ輸出されています。青森県辺りから北海道にかけてという形で広く分布しており、これはいずれも先ほどの北緯四〇度よりも北側の世界ということになります。すなわち、渡島狄と津軽の蝦夷とが、交流する素地があったということになります。この渡島狄というのは、平安中期に北海道から南下してくる擦文文化と呼ばれる文化を生み出している主体の勢力と考えられています。

さて、この乱では、秋田城より北で米代川沿いまでの地域と、それから津軽地方の大部分は反乱側についたと考えられます。津軽地方のごく一部と渡島が政府方ということになれば、渡島と近い、津軽のうちのより北側の方が国家側についたのかなというイメージを持ちます。ですから、米代川に近い津軽地方の南の方は、比較的米代川流域と連携を取っていたと考えていいのかなと思います。ただし、津軽は秋田城下には入っていません。具体的には、先ほど触れました反乱を起こしたとして挙げられている城下の十二の村の中には津軽地方は入っていません。ですから秋田城で把握できていたのは米代川の流域までですが、しかしそれを越えたところで連携しているような動きがあるところからすると、津軽地方の南部と米代川流域で交流はあったでしょう。発掘調査の成果を見ていくと、米代川の流域と津軽地方との間で、それほど違っているようなことは見いだせません。両方をまたぐ同質な社会があった可能性があります。国家側が米代川の流域までという形で線引きをしたために、そこから北側の津軽地方の情報あまり入ってこず、その結果どのぐらいの大勢力かわからないという恐れを政府方は抱いているわけですが、それでも、実態としては米代川流域から津軽地方にかけて同じような

文化を享受する世界が広がっていたのではないかということが考えられるかと思えます。

二 元慶の乱後の「城柵の北」

元慶の乱後を語っている文献史料は非常に少ないので、当然、出土文字資料による説明が期待されるのですが、その中で注目されるものをいくつか紹介したいと思います。米代川の流域で注目されることとして、西暦九一五年に十和田火山が噴火しました。このときに十和田火山は大量の噴出物をより南側に噴出して、それが夏の雨のときに洪水となり、土石流となって米代川に流れ込んでいきます。その土石流（シラス洪水）で埋まった遺跡があります。これは噴火の年代がわかっておりますので、それと照らし合わせてはば年代の限定できる遺跡ということになります。『扶桑略記』の裏書に延喜十五年七月十三日のこととして「出羽国言上す。灰降ること高さ二寸、諸郷の農桑枯損の由」というようなことが知られ、この十和田火山の噴火がこの記録に合致すると考えられます。

注目される遺跡として今日二つほどご紹介しますが、その一つは胡桃館遺跡です。ここは元慶の乱のときには、榎淵という村があったところに当たるわけですが、立派な大型の建物が見つかっていました。非常に太い部材を井げたの枠のように組み上げた頑丈な作りです。それからその建物を、牧場の柵みたいな、施設としては比較的簡略な柵なのですが、そういうもので囲った区画があります。建物の規模は、一般の住居跡とは考えられない大きな施設ですので、その性格については議論があるところでです。

この遺跡で木簡が見つかっておりまして、その木簡には「物名帳」と見えて、何かを支給した記録を帳簿にして書き記した木簡のようです。その中に、玉作とか、建部といった姓の人名が出てきます。この玉作や建部という人名を追いかけていくことによって、元慶の乱の後、この米代川の流域がどういうふうになっていったかを考える材料になるのではないかと思います。

まず玉作ですが、実は元慶の乱の中で玉作と名乗る人物が二人ほど出てきます。『日本三代実録』の元慶二年六月七日辛未条に「最上郡擬大領伴貞道、俘魁玉作宇奈麻呂」と二人出てくるうちの後者の人物です。俘魁というのは俘囚の首領ですから、蝦夷の族長みたいな人ですけれども、この人たちが政府軍方として手勢を率いいて反乱軍に攻撃を仕掛けたというような話がでてくるわけです。

ここで一緒に出てきた伴貞道という人物のほうから先に考えていきたいと思うのですが、最上郡は出羽国の南の方、現在の山形県にある郡です。その擬大領とともに出撃したということが注目されます。出羽国の南部の郡で、しかも擬任郡司と言いますが、正員の郡司ではなくて仮採用の郡司です。この出羽国の擬任郡司がどういう扱いなのかということを考えるうえで、大同元年（八〇六）十月十二日の太政官符が注目されます。「陸奥出羽両国、正員の外、郡司、軍毅を擬任するをゆるすの事」という内容の命令で、「郡司の任、職員限り有り。しかるに辺要の事、すこぶる中国に異なれり。望み請うらくは、幹了勇敢の人を擬任し、宜しく防守警備の儲けとなすべし」というような形の提案がなされて、この案が認められています。ということは、陸奥・出羽の擬任郡司というのは、非常の

際に備える防守警備の担当として使われるポストということであり、そのような備えが必要だと考えられるのは、まさに辺境の一番北の城柵だろうと思います。つまり、陸奥・出羽では、国内の擬任郡司が北辺の城柵に配備されて、そこに勤務することになり、蝦夷との戦争に備えるというような状況だったのではないかと推測されるわけです。そうすると、出羽国の場合であれば、北辺の城柵は秋田城もしくは雄勝城ということになりますので、そこにいた部隊を率いて戦ったとみることができそうです。そうすると、同じときに攻撃している俘魁の玉作宇奈麻呂も、秋田城もしくは雄勝城に勤務していた、あるいは勤務とは言わないまでもそこに出入りしていた俘囚である可能性が見いだされるわけです。

それからもう一人、玉作の姓を名乗っている人物としては、玉作正月麻呂という者が、『日本三代実録』元慶二年（八七八）七月十日癸卯条に出てきます。「ここにおいて、俘囚深江弥加止、玉作正月鷹ら、三村の俘囚二百余人を誘い率いて、夜襲して賊八十人を殺す」とあり、政府方に貢献した、夜討ちをして賊をやっつけたということで表彰されるのですが、三村の俘囚として出てくる添河、羈別、助川の三つの村に影響力があるということは、秋田城よりも南東側の地域にいた蝦夷かと思われそうです。ですからおそらくこの玉作という姓の人たちは、もともと米代川流域にいた蝦夷ではありませぬ。榎淵村は反乱側の勢力の真ん中ですから、元慶の乱時点で、そんなところにはいなかった人たちが、延喜十五年段階の胡桃館遺跡の活動している時期に入り込んできているのではないかと思います。それから、建部ですが、秋田城の出土遺物の中に、これを記した

資料が一つあります。煉瓦の一種に墨書したものに、建部友足という人物名が見えます。その隣の行には「[面郷]」見えて、これに相当するような地名としては、秋田城の木簡の中に「[広面郷]」と記したのが見つかっています。広面郷というのは、現在の秋田大学のあるあたりの地名で、おそらく今の秋田駅の東側辺りの一帯だと思えます。その地名と一緒に見られることからすると、秋田城の周辺、関連の深いところにいた人物の可能性がありそうです。ですから建部がいたのもおそらく反乱軍側ではないだろうと考えられます。そうすると、この胡桃館遺跡の木簡にでてくる人名は、秋田城や雄勝城などに勤務していた人々が、この米代川のころまで派遣されてきているとみられ、政府の出先機関のようなものの可能性があるのではないかと思うのです。

おそらく元慶の乱の後に、米代川流域に城柵下の勢力がそのようにして進出して行っているのではないかと考えたいわけです。例えば、天暦元年（九四七）に狄坂丸の乱と呼んでいる事件がありましたが、「狄」として記されていますので、これは蝦夷なのですが、その蝦夷の坂丸が、國家に齒向かって一三人を殺害したということです。「件の坂丸らは、軍士を挑発し、兵糧を吞き運ぶ」というように史料に出てきまして、どうも政府の下請け仕事のようなことをしています。ですから國家機関の下で、俘囚や狄と呼ばれるような蝦夷が勤務するということが、どこかの地域で行われている可能性があり、この木簡に出てくる玉作某も俘囚として働いている可能性もあるかと思えますから、そういう形態の勤務が行われているような施設が、米代川流域に進出していった可能性があるだろうと推測さ

れるわけです。

それからもう一つ興味深い遺跡としては、これは江戸時代に見つかったのですが、小勝田の埋没家屋と通称されているものが、同じ当時の楡淵村にあたる地域にあります。菅江真澄などがスケッチして記録に残してくれていたもので、現在の研究にも使えるのです。

そこからは、一種の木簡も見つかっています。長崎七左衛門という人の記録では、長さが一尺三寸あまりでさし渡し一寸四分〜一寸五分で六角の柱だという話がでてきており、その六角柱には干支が並べて書いてあるのです。菅江真澄は、自分の考察を入れて説明図を描いています。

実は、これと似たようなものが、一五年ぐらい前に秋田城跡で見つかっています。秋田城の木簡の中に、七角柱で干支を列記した棒のような木簡がありました。これは用途としてはおそらく、干支を使って暦を計算する、日付を計算したりするようなものではないかと思えますが、八世紀末に既に秋田城で使っていたものが一〇世紀段階で米代川流域で使われているのです。もちろんそれより前から使われるようになっていた可能性もありますが、少なくとも一〇世紀までのうちに城柵下の文化が伝播されているということが、ここから読み取れるわけです。

こういう棒が使われているということは、棒だけでは役に立ちませんから、おそらく暦本体も使われているだろうと思います。元慶の乱の後に、秋田城下の勢力が米代川流域に進出、もしくは影響力を強めていっていることになるかと思えます。しかし、実はそのようにして勢力は入っていくのですが、最初に申し上げました

ように、郡は建てられていません。国郡制による地方行政区画が作られるまでには至らないのです。ですから、城柵の付近の世界ともまた違った扱いでずっと続いていくということになります。

三 平安中期の「城柵の北」

以上のような様相が、平安前期の一番最後ぐらいに見えるのを受けて、平安中期にはどのようなことが現在確認できるかを申し上げますと、北の方では大規模な密集集落が見つかってきています。計画的な住居配置のなされたものとして、例えば青森県浪岡町（現青森市）の野尻（3）遺跡では、四角い竪穴をU字型の溝がめぐる形の住居が、等間隔ぐらいで並んでおり、これが一軒一軒の家になります。それが、大体同じ等高線に沿って並んでいます。緩やかな傾斜地を、ちょうど造成して住宅団地を作っているかのように、等間隔で住居が同じ方向を向いて並んでいくようになっていました。また八戸市の林ノ前遺跡では、これはもっと急な傾斜地を削って同じ方向に向けて密集した住宅が並んでいるというようなのが見られます。どうも人々がかかなり集中して居住しているような様相を呈しているわけです。

それからこの時期に特徴的なこととして、囲郭集落、すなわち堀などで囲われた集落が出てきます。これは現在、北東北の歴史を扱っている研究者が、非常に注目しているものです。堀で囲われている以上は、平和でない社会で、これは防御のためのものであるという見解があります。その背景としては、中央に北方の特産物がどんどん送られていくために、その中継をしているような国家側の出

先の官人との間の軋轢であるとか、あるいは富を蓄積した集団間の抗争であるとか、そういった状況を背景にして、この平安時代中期に、北緯四〇度よりも北の世界が戦乱の時代になっているのではないかと考えられています。このような見解から、こういった堀で囲われた集落を防御制集落と呼んだりしているのですが、しかしすべてが防御的な集落なのかどうかというのは、今後さらに検証しなければなりません。例えば、青森市の新田（1）遺跡は、比較的低地に立地していますが、あまりそのような防御をしている雰囲気がありません。そういった低地の集落は、むしろまだまだあまり見つかっておらず、未知の部分があります。

こういう囲郭集落は、どういう範囲に広がっているかと申しますと、まさに北緯四〇度ラインの北側に分布しています。代表的なものとして、青森県浪岡町（現青森市）の高屋敷館遺跡を挙げることができそうですが、ちょうど川に向かう断崖の切り立った上に集落を作って、その山側の出入りができるようなところは、深い堀を掘ってその周囲から隔離させてしまっています。この北の世界で広範囲にわたって囲郭集落が分布する状況が解消されるのは、奥州藤原氏の体制ができるころであるということが、考古学的にわかっています。ですから平安中期にずっとこういうものが続いているというのが問題なわけです。

同じ時期の問題として、擦文文化の広がりという現象があります。平安前期ごろに北海道に特有の土器だった擦文土器という形式の土器があります。特徴的な刻線のある模様をしている土器ですが、平安中期の一〇世紀後半から一一世紀にかけては、青森県域から秋田

県の北部辺りにちらほらと出てくるのです。かなり広がって見つかっています。下北半島から津軽地方にかけてずっと見つかってくるということですので、北からの文化が流入してきていることが明らかです。

一方で南からの文化の展開も、それより前にはなかった様相が見つかります。青森市の新田(一)遺跡では溝跡から祭祀遺物が出てきていますが、これは八・九世紀には城柵支配下で広く見られるものです。さらに、仏教的な色彩を持つような遺物もあります。一〇世紀後半から一一世紀にかけての時期で、青森県内で出土している仏教的な遺物としては、たとえば青森県平賀町の鳥海山遺跡では、「大佛」と書いた土器が見つかっています。それから、いくつかの遺跡で見つかっているものとして、鉄製錫杖もあります。平賀町の五輪野遺跡では、三鉢鏡や柄香炉の取っ手が見つかっています。これらはまさに寺院に関与するような人々が持っているようなものですが、これが集落の中から見つかってくるのです。

それから、おまじない、祭祀に関わるものとしては、斎串という、まじないをするときに立てるようなものや、墨書土器といって何かの祈りを込めてお供えをする際のものなどが見つかります。これらは、九世紀段階ですと秋田城以南ではたくさん使っているものなのですが、「城柵の北」ではその時期にはあまり見られません。それが平安中期には入ってきて広まっているということです。

それからさらに注目されるものとしては、新田(一)遺跡で見つかった木簡の中に、物忌札が出てきています。物忌札というのは物忌の際に屋敷の出入口に立てて、物忌なので今日はここのお屋敷に

は出入りしてはいけませんということを示す、外界と遮断するための札です。新田(一)遺跡のものは「忌札見知可」という文言で、「これは忌札であるからこの効力を知りなさい」という意味だと思えますが、そういう効力を見せつける文句が書かれています。物忌札の類型の一つであると解釈をしてよいと思いますが、実はほかの物忌札の実例とはだいぶ違います。中世の物忌札は「固き物忌」、あるいは「急々如律令」とか「九九八十一」「八九七十二」とかそういう文言を書いたものが、大体近畿地方を中心によく見られるのですが、こういうものとは文言が違います。さらに、より古い時期に都で使っているものとも雰囲気が違うようです。長岡京で見つかっているものは、物忌札の一番古い事例になりますが、これも「今日物忌、このところ預人にあらずして、他人たやすく出入りすることを得ざれ」と書いてありまして、要するに「出入りするな」と書いています。ですから、辺境にこういった風習が伝播していく間に、独特な展開を見せているような気もします。

一方で、都風のものがそのまま伝わってきているものもあり、例として檜扇を挙げることができます。檜扇が見つかるというのは、これは九世紀までの地方遺跡であれば、役所的な要素ではないかと評価されるものなのですが、平安中期では地方豪族の世界までこういうものが広まり始めているかと思えます。北の社会にも同じようなものが入っているとすれば、それは蝦夷社会の長者とでも呼ぶような存在に受容されているのだろうかと思われまします。

墨書土器に關してもう一言付け加えましょう。墨書土器は関東地方や南東北では、九世紀ごろの遺跡で大量に出ることが多い遺

物です。平安中期にはこの北の世界でも同じようなものがちらほら出てきますので、同様の信仰、おまじないのようなものが持ち込まれたことを示すと思いますが、ただし、一つの遺跡あたりの出土点数は、北東北ではわずか数点ぐらいです。関東や南東北では、一つの集落で数十から数百でてきますので、行っている行為の共通性というものはあると思いますが、一カ所での頻度、あるいは行為の広がりという点では、関東や南東北の最盛期ほど盛んだったとは言えないのかもしれませんが。

ただし、そういう状況の中で注目されるのは、青森県あたりに特有の遺跡としてみられる円形周溝と呼ばれる遺跡からの出土例です。円形の溝なのですが、これはまん丸の形に溝を掘ってその中を墓にするという七世紀の蝦夷の古墳からの伝統をひくものとみられ、一〇世紀ぐらいになりますと、周溝の一カ所に出入口のように通れる平坦な部分を残した溝になり、上から見るとアルファベットのC型の周溝になります。この時期のものもお墓の可能性が高いと考えられているのですが、浪岡町（現青森市）の野尻（2）遺跡では、この溝の中から、「小」という字を書いた墨書土器が複数点出ています。単独でなく複数点出ていますから、この円形周溝に伴う儀礼や祭祀を行った可能性があると思います。これがどういう祭祀を示すのかはまだよくわからないのですが、蝦夷の文化と南から入ってきた律令制下の文化が融合して、何かが行われているという事例になるかと思えます。この時期に、北と南の文化が混在している独特の社会が、どうもこのあたりでは形成されてきており、そしてそういう社会を経た上で、平安後期に入っていくことになりました。

平安後期につなげていく前九年合戦についての史料として『陸奥話記』がよく知られていますが、その中に、俘囚の酋長であった安倍頼時に対して、政府方の源頼義が、安倍頼時の背後にいる集団と手を組んで挟み撃ちにするという作戦が出てきます。安倍頼時は北上盆地を中心に勢力を持っていますが、それより北にいる人々の地が登場してくるのです。「ここに鉿屋・仁土呂志・宇曾利、三部の夷人を合わせて、安倍富忠を首として兵を発し、まさに為時に従わんとする」と見えて、為時というのはこのとき源頼義からの使者になっていった人物で、三陸辺りの者なのですが、彼に従った鉿屋、仁土呂志、宇曾利という地の者たちが、安倍頼時よりも北にいる集団ということになります。実際にここに出てくる地名がどこのかは、いくつかの説があって比定もされていますけれども、いずれにしても困郭集落を含めて大規模な集落が展開していた地が、こうしたこの三つの地名として出てくる勢力にあたるだろうと思われる。

おわりに

平安貴族が豪奢な生活をしているところに、城柵の北側でも似たようなものが普及している部分もあります。北方社会と中央の貴族社会とは決して断絶してはいけません。鷲の羽や馬、あるいは毛皮などは、貴族の嗜好品として喜ばれ、そういうものが貴族社会に向かってどんどん運ばれていっている時代です。一方で、それと逆の方向に北方に流入していく、貴族社会に由来するような文化があるのです。その実情は文献史料にはなかなか出てこないのですけれども、そういうつながりを考えてよいでしょう。

平安中期の「城柵の北」の世界は、切り離された社会ではなく、むしろ急速な文明的進展を迎えている時期でもあります。そういう時期に見られる囲郭集落のような現象をどうとらえるのか。不安定な社会なのか、それほどでもないのかという評価については、現段階ではやや揺れているような現状であります。城柵の北の世界で活躍した人々は、蝦夷や俘囚と呼ばれていた人々ですが、南から入り込んでいってそういう中に身を活かしていった人もいるのです。南から北からも、人や物が交流して独自の様相を見せていったというのが、この地域の平安中期の姿なのです。辺境であるがゆえに、文献史料に残された情報は少なく、今後は出土文字資料による説明がカギになってくる部分も大きいと思われれます。ぜひとも注目していただければと思う次第です。